

Title	聖婚
Author(s)	井本, 英一
Citation	大阪外国語大学論集. 36 p.55-p.74
Issue Date	2007-08-23
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80028
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

聖 婚

井 本 英 一

The Sacred Marriage

IMOTO Eiichi

At the excavation site of Mukadezuka mound, Miyazaki prefecture, an interesting female *haniwa* (clay image) was found. She exposes her privates rolling up the hem of clothes. What means her act of sexual provocation ?

A daughter of an Egyptian dead king would act sacred prostitution on his tomb to make her father live a good life after his death.

The men who shared the bed with her were regarded as the ancestors of the another world visiting her dead father, pouring vitality into her to help her father's resurrection.

2006年12月23日から大阪府和泉市の府立弥生文化博物館で開かれた「発掘された日本列島 2006—新発見考古速報展」で、全国48遺跡から約730点が展示された。その中の1つ宮崎県百足塚古墳ひかてづかの女性人物埴輪は瞠目すべき特徴を持っていた。女性は右手で衣服の裾をたくし上げて女陰を見せる。国立歴史民俗博物館教授広瀬和雄は、これはアメノウズメ神話を彷彿とさせるが、女性器は生殖のシンボルだから、共同体の再生産にとって大切だったとの解釈も出されそうだと解説している（『朝日新聞』（夕刊）'06.12.21）。

墓地と女陰を露出した女性の複合は、エジプトの現存最大のピラミッド（最終墓地ではないが、死体を搬入して殯をした場所）である、カイロ南西部にあるギザの大ピラミッドの伝説を想起させる。ヘロドトス『歴史』（松平千秋訳、筑摩書房、1967年、岩波文庫版もある）にいう。ケオプス王（クフ王のギリシア語表記。前2579-56頃在位）は国民を悲惨な状態に陥れた。王は10年かけて地下に葬室のある階段式ピラミッドをつくらせた（2.124-5）。

王の悪業は限りを知らず、金に窮して自分の娘を娼家に出し、金子の調達を命じた。登楼してくる客には、自分のために工事用の石を1個ずつ寄進してくれと頼んだ。祭司の話では、大ピラミッドの前面にある3基のピラミッドの中央のものは、こうした石でつくられたものであるという（2.126）。クフ王のあと、カフラー王（ギリシア語表記ではケブレ

ン) が継いでピラミッドを建造したが、クフ王のピラミッドほど大きくはなく、地下の葬室もなかった。クフ王のピラミッドの地下室は周囲に水路をめぐらした孤島のような観を呈し、その中に王の遺体が横たわっていた (2.126-7)。

ヘロドトスは前5世紀の人物であるが、エジプトで聞いたことを書きとどめている。クフ王の遺体を安置するピラミッドと王の遺体の(殯の)儀礼のために、王女が見境いなく男と交わり、その代償を取る習慣があったことが分かる。カフラー王のあと、クフ王の息子メンカウラー(ギリシア語名ミュケリノス)が王位についた。王はエジプト人によって最も敬愛された。王の不幸は一人娘の死であった。王は中空の木製の牛をつくらせ、金箔を張り、その中に娘の遺骸を入れた(2.129)。

木の牛はサイズの王宮の中に安置され、近くの部室には王の側妾たちの巨大な木像20体ほどが安置してあったが、それらは彼女たちを写した裸像であった。王女は父ミュケリノスに犯されて縊死し木牛の中に入れられたのであるが、年に1度戸外に曳き出された(2.132)。

この王のピラミッドは、ギザにある3大ピラミッドのうち一番小さいが、遊女ロドピスによってつくられたといわれる。ロドピスは女奴隷で、イオニアのサモス島から連れてこられ、売春を生業として巨大な富を築いた(2.135)。

ヘロドトスのいう所に従えば、王女は父に犯されて自死したというが、実際は父王と王女の最近親婚であったと考えられる。王女がなぜ自死したのか、その理由は明らかではないが、王女の遺骸を入れた木牛が毎年1回戸外に曳き出され、行像の儀礼が行われたという。このとき、王の妻妾を象った多くの裸像のある部屋で遊女たちが客を取り、稼ぎを王室に納めたのであろう。遊女ロドピスはその代表として描かれたのであろう。

時代はエジプトのクフ王よりは2000年も新しいが、小アジア西部のリュディアの富王クロイソスの父アリュアッテスの陵墓は、商人、職人、娼婦によって建造された。そのうち、娼婦たちの仕事の量が最も大きかった。娼婦たちは嫁入りする前の娘たちで、陵墓の建設費以外に、自分の婚資も稼いでいた(1.93)。

ヘロドトスよりはずっと新しく、紀元前後に著作活動をしたストラボン『ギリシア・ローマ 世界地誌』(I, II, 飯尾都人^{くにと}訳、龍溪書舎、1994年)の中でバルティア時代のアルメニアにおけるアナイティス(アナーヒター)女神の神殿奴隷について述べる。アルメニアではアナイティス女神の神域を大事に祀り、諸方にこれを造営している。アキリセネ地方の神殿には男女の奴隷を多数奉納している。とりわけ驚くべきことではないが、名士たちは自分たちの娘を処女のまま神殿に奉仕させている。娘たちは神殿で娼婦なみに働いたあと嫁にゆき、男も嫌う気配もない。ヘロドトスもリュディア族についてこれと似たことを語っており、そこでは女はみな娼婦の業を行うとしている(II, 98-9頁)。ストラボンはヘロドトス『歴史』のアリュアッテスの陵墓建造に触れ、この墓が売春の記念碑であると説明する人たちもいるという(前掲書、247頁)。

ここでは娘たちがアナーヒター女神殿の神殿娼婦になることを述べるが、陵墓の建設に貢献する話はない。これらの男女の神殿奴隷はヒエロドゥーロイと呼ばれた聖なる奴隷で、

ヒエロ、ヒエラと男女の区別をして呼ばれることもあった。神殿奴隷と呼ばれた聖（ヒエロ）奴婢（ドゥーロイ）は、女神殿で年1回行う神殿参詣者の男との交会で手に入れた金銭その他は神殿に納入して、彼らの女神への務めを果たした。聖なる男娼はアナーヒター女神の夫であるアフラ・マズダーの役割を演じ、参詣する女に神の種を与えた。エジプトのメンカウラー王の王女の遺骸と妻妾の木像は、年1回の祭りでロドピスを代表とする聖娼によって聖婚を演じ、その収益はメンカウラー王のピラミッド建設の費用に当てられた。聖娼と交会する男は男神、天神と見なされたので、彼らの力によってのみ難工事が成就すると考えられた。

ヘロドトス『歴史』にいう。アッシリアでは毎年1回、嫁入り適齢期の娘を全部集めて一定の場所へ連れてゆき、器量のよい娘から順に周りに集まった男に売っていった。器量の悪い娘もそれなりの金で買われていった。たとえ自分の娘でも、自分がやりたいと思う相手に娘を嫁がせることは禁じられており、娘を買った男も必ずその娘を妻にするということの保証人を立てなければ、娘を連れてゆくことは許されなかった（1.196）。

娘が集められる場所は女神を祀る神殿であった。男たちは女神の相手をする男神と見なされた。男が支払った金銭は神殿に寄付された。アッシリアの娘は年に1回、神殿聖娼として男に選ばられなければならなかった。1.199に伝えられるバビロン一夜婚では、男と交会した女は夫婦にならなかったため、神殿における聖婚にも種々な形式があった。古代ローマでは年に1回3月1日、カピトリウム丘のユーノー女神殿に適齢期の娘が集められ、同数の男たちに披露された。男たちは壺に入った娘の名を書いたくじを引き、女を連れ去った。くじはユーノーの夫ユピテルの意思であり、男たちはそれぞれがユピテルの化身であった。

ストラボン、前掲書にいう。エジプトのテバイ（ルクソール）市ではとりわけゼウス（アンモン）を祀り、容姿が美しい名門の出の処女がこの神の祭司となる。ギリシア人はこれらの処女を「童女祭司」と呼ぶ。この祭司は身体に自然の浄めが生じる（初潮）までは仮り妻の役を果たし、自分の意に添えば、どんな男子にも添うことになっている。初潮のあとは夫に嫁ぐが、仮り妻の期間が過ぎて嫁ぐまでの間に処女のため歎きの儀式が捧げられる（Ⅱ、596-7頁）。ディオドロス『神代地誌』（飯尾都人訳、龍溪書舎、1999年）に、テバイの最初期の墓にゼウスの側室たちの墓があり、離れた所に王の墓があるという史家ヘカタイオスのことばが引いてある（1.47）のが彼女らの死と再生の儀礼の跡であろう。伊勢神宮や賀茂神社に奉仕した斎宮や斎王の起源はこれらの女性とつながっているが、ここでは省略する。

ヘロドトスが伝えるエジプト王ランブシニトス（エジプト名ラムセス、ラメセス）はクフ王の先代というが（2.124）、実際はクフ王よりは1400年も前の王である。この王は自ら冥界に下ってゆき、地下のデメテル女神と穀子を争い、女神から黄金の手巾をもらい、再び地上に戻ったという。これを記念して、1人の祭司が目隠しをして地上のデメテル神殿まで2匹の狼に導かれてゆき、再び狼に導かれて元の場所に帰ってくるという行事があった（2.122）。

この王にはもう1つ興味ある伝説がある。王は莫大な財宝を所有したが、石造の部屋をつくらせて、そこに保管した。1人の職人が石を1つ外せば部屋の中に入れるよう細工しておいた。職人はいまわの際に2人の息子に秘密の入り口を教えておいた。2人は父の死後、王の宝庫に盗みに入り財宝を持ち出した。王はこれに気付き罠を仕掛けておいた。兄弟の1人が罠に掛ってしまったので、他の1人が兄弟の首を持って帰った。王は怒って首のない死体を塀に吊して見張りをつけておいた。

兄弟は番人を酒で酔いつぶれさせ、死体をおろし家に持って帰った。王は王女を娼家に送り、客を取る前に客から自慢話を聞き出し、例の事件を話した者がいたらその男を捕えるよう命じた。盗賊は死体の片腕を根元から切り落とし、上着の下に隠して登楼した。王女に問われると、一部始終を答えた。王女が捕えようとする、死体の腕を女に掴ませ、戸口から立ち去った。ランプシニトスは男の才知を賞め、王女を妻に与えた(2.121)。

この伝説はピラミッドの盗掘を元につくられたものであると考えられる。ランプシニトスの冥界訪問と地下の女神との交渉を記念して女神殿の祭りが行われるようになった。目隠しをして女神殿に詣る祭司はオシリス神を表わし、女神デメテルはイシス女神を表わした。女神殿にはイシス女神にあやかる女たちが待機しており、自分の気に入った男を物色したのであろう。神殿娼婦はイシス女神であり、娼家はイシス神殿で、神殿娼婦となった王女はイシス女神であった。ランプシニトス王の伝説にはピラミッドのことは1語も出ない。ヘロドトスあるいは当時のエジプト人の時代錯誤で、ランプシニトスはケオプス(クフ)の先代とされたので、ピラミッドも当然のことながら存在し、その建設費を王女が聖所淫売によって調達したことは自明の理とされた。

ヘロドトスはブバステイスにあるアルテミスの神殿に参詣する人たちの様子を伝えている。参詣人たちは男女一緒にはしけ舳に乗り込み、カスタネットや笛に合わせて歌をうたい、手を叩いて拍子を取る。1部の女は船を岸に近づけて、大声をあげて土手の女に呼びかけてひやかし、中には立ち上がって着物をたくし上げる者もいる。岸沿いの町を通過するごとに同じようなことをする。ブバステイスの町に着くと盛大に犠牲を捧げる。この町に集まる男女の数は子供を除き70万に達するという(2.59-60)。

ブバステイスはカイロの東北部に位置する古王国時代以来の町である。猫神バステイトの家の意であるが、猫以前の神はライオンであった。ヘロドトス時代は処女神アルテミス(エジプトのイシス女神に相当する)を祭った。アルテミスは美しい半神半人の美少女に取り囲まれ、獵犬を伴って山野を跋涉した。彼女は未婚の女性に崇拜され、大祭では男性の参詣者を待ち受けた。参詣者を乗せた船に乗った女の中には、岸の見物人に悪態をついたり、裾をまくり上げたりする悪態祭りの行動を取る者もいた。

ライオンや猫はエジプト人の祖先獣であった。これらのトーテムが地母神イシスと同定されたのは、ことに猫の多産性が原因であったと考えられる。ヘロドトスは処女神イシスにアルテミスを当てた。アルテミスは多産の象徴である犬をあてがわれた。ギリシア神話ではアルテミスは熊の化身であるので、熊をトーテムとする部族の処女神であった。この女神の周辺に群れをなして集まるニンフらは原初の型態はアルテミス女神の他我で、男性

の参詣者を待つ処女神であった。

大阪府大東市にある野崎観音は縁結び、子授けに霊験のある十一面観音を祭ることで、上方では信仰の篤い観音である。開基ははっきりしないが、江口に多く住んだ遊女によって再興されたと伝えられる。野崎参りの光景は近松門左衛門の浄瑠璃『女殺油地獄』にも出るし、上方落語の「野崎参り」によって人口に膾炙している。歌謡曲によってもその光景を口ずさむことができる。かつては春秋2回の（現在は1回）縁日に、寝屋川の水量の多い時代、屋形船を仕立てて野崎参りをした。船の中の参詣人は、土手を歩いて参詣する人びとと悪態の浴びせ合いをするのが常であった。

ここでは着物をたくし上げる光景はないが、きわどい罵詈雑言の応酬があった。野崎観音は福聚山慈眼寺が正称で、寺が遊女によって再興された伝説を持つことは興味深い。この寺は古い形式として、年1度男女の歌垣が行われ、聖婚が行われたのではないかと考えられる。エジプトのプバステスのイシスの社の参詣者の中には着物をたくし上げて岸の者を挑発する者もいたが、野崎参りでも同じことが行われたに違いない。野崎観音中興の祖となった江口の君の場合は、古代の神殿娼婦の意味はなくなり、仏恩に応える卑賤の身という設定になる。

プバステスの参詣者は総計70万に達したという。野崎参りも恐らくは10日間に数千数万の参詣者を数えたであろう。プバステスの場合は聖娼を相手にした聖婚や男女の区別のない乱交が宗教的儀礼として行われた。野崎参りでは、乱交とまではゆかないとしても、かなり自由な男女の交わりが期待された。一般の寺社には、古代の神殿娼婦の存在の名残りである遊廓を伴う場合がある。現在は精進落としの場とされるが、聖娼の住む場であった。

『風土記』の時代には、神の奴婢（ヒエロドゥーロイ）の観念はまだ生きていた。『常陸国風土記』（吉野裕訳『風土記』、東洋文庫、1969年、所収）によると、軽野の南に童子女の松原がある。その由来は、カミノヲトコ、カミノヲトメといわれた若い男女が歌垣に出て思いを語り合い、人目を避けて松の木の下で手を取り合って1夜を送ったあと、それぞれ松の木になったためという（22-4頁）。神の息子、神の娘という観念は、古代西アジアに見られた観念と同じものである。歌垣では男たちは神の娘と交わらんと欲し、女たちは神の息子と交わらんと欲した。歌垣が行われた野原では、男女の乱交が行われ、松に化した多くの男女がいたと考えられる。

『万葉集』の時代、筑波山で行われた歌垣でも乱交が行われた。巻第9、1759歌によると、筑波山の裳はき津のほとりに若い男女が集って歌垣をする。その歌垣で、他人の妻に自分も交わろう。他の人も私の妻に声をかけよ。この山の神も昔から禁止しない。愛しい人も今日だけはとがめ立てするな、とある。歌垣が行われる場所には水の流れ、泉、池のようなものがあり、ことに女子は裳を脱いで褌をしたあと、男子に声を掛けられた。年に1度行われた筑波山の歌垣では、山に集まった男は全て神の化身とされた。女はスカートを下ろして神を誘ったのである。

イラン人は現在もイスラム教聖者の名前を冠したソフレ儀礼を行う。ソフレということ

ばは床上のカーペットの上に敷いた食布のことで、この上に各種の料理を並べ、女性だけで行う願かけの行事である。未婚の娘は良縁を願い、既婚の女性は男児の誕生、夫が第2、第3夫人をつくらないこと、家庭の平穏を願う。このような女性による願かけ行事は、本来は年末の5日間に行われたもので、西アジアの古代文明には種々な形で見られる。年末には祖先の靈魂が大挙してこの世を訪れ、この世の子孫と新年を共に過ごし、再び祖霊の国に帰ってゆく。

イランや古代西アジアの文明圏では新年を3月21日の春分に設定する国が多かった。新年の期間は10日、12日、14日など地域と時代によって異なった。年末には祖霊を迎える行事が女だけで行われ、正月行事が済んだ翌日は郊外の沢、小川、泉のほとりで女は裾をからげて水に入り祖霊を送った。女のスカートは、年末に出会った見知らぬ男からもらった首に巻いた布を縫い合わせてつくった。見知らぬ男は年末に訪ねてくる祖霊の化身とされたので、祖霊の精を身に着ける行為であった。その布でつくった裳を祖霊を送る際に脱いで祖霊の受胎を再確認したのである。

ユダヤ教徒も新年に川、海、泉に出かけて禊をする。捕囚時代にバビロンで知った行事であるといわれる。中国の清明は春分から15日あとの4月5日ごろに当たり、古来墓参して墓の掃除をする日である。この日、墓参りした女子は墓前で裾を脱ぐ習慣がある。祖霊を胎内に迎え入れる行為である。小正月に墓地を訪れるイラン人女性は平たい墓石に尻をついて食事する。清明の日は旧暦3月3日の節句で、女たちは川や海に出かけて膝まで裳をからげて禊をした。あるいは裳を脱いで洗った。3月3日は曲水の宴など祖霊迎いの儀礼の変化したものがあるが、ひな流しの中に祖霊送りの原型を見ることができる。沖縄では3月3日、女性は海岸に出て膝まで水に浸って禊をしてから行事を始める。キリスト教社会はキリスト教以前の習慣を踏襲したと考えられるが、復活祭がくるこの時機と、聖ゲオルクの日である夏至の日に女たちがドナウ川に浸かる風習がある。膝まで裳をからげて禊をしている女性の股間に、上流から流れてきた丹塗りの矢やヤマグワ（柘）やトネリコの枝が膝にからみつき、民族の始祖となる神の子を生む説話は広く見られる。

中国では、立秋の候に行われた年1回の男女の交会の日である七夕は、7月15日の盂蘭盆の導入部であった。中国では春分正月とは違う立春正月（より古いものらしく、イランにも痕跡がある）に則った暦を用いるが、いわゆる旧暦の年末や小正月にも祖先霊の去来があった。七夕行事では牽牛と織女は天の川を挟んで向かい合う。訪ねる方は牽牛であるが、カササギが抃げた翼の橋を渡る。川上から織女を訪ねるのではない。

七夕には水の儀礼が付随しており、ことに女子にとっての願かけの祭りであった。1週間あとの盂蘭盆でも、沖縄では女子が海岸で祖霊迎えをする。かつては海岸で釜に赤飯を炊き、共食する風もあった。明治初期、関東にもこの風が見られた。七夕の年1度の男女の交会の果実は、翌年の4月8日に実った。天孫降臨神話では、天から天の浮き橋を伝って降下した天孫は、水辺で機を織るコノハナサクヤヒメと出逢い求婚する。女子が水辺で祖霊に逢うモチーフが見られ、聖婚へと進んでゆく。

宮崎県百足塚古墳から出土した、裾をたくし上げて女陰を見せる埴輪は、神殿あるいは

陵墓に仕える聖娼や巫女であった。神殿娼婦は多くの参詣者と乱交することによって古墳の被葬者の化身である参詣者の精力を身につけ、被葬者の冥福が増大することを願ったのである。埴輪は被葬者の娘がそのモデルであった。

毎年刈り取られては死に、翌年再びその種子が再生する穀物の霊が原初の姿であったアドーニスの葬儀では、聖娼の号泣と聖所淫売が行われた。聖娼は売淫によって金銭と客の精力を集めてアドーニスを再生させた。アドーニスの儀礼では、アドーニスの母であり恋人であるアプロディテーはアドーニスの遺体を海に捨てた。海に捨てる行為は、アドーニスをあの世に送り返すことを意味した。古代からつづく西アジアの祖霊の送迎が水辺で行われるのはこのためであったことがわかる。古墳の周濠の存在もこのような観念に発していると考えられる。ヘロドトスはエジプトのクフ王はピラミッドの地下室の濠で囲まれた島に葬られていると報じているのも同じ考え方で解釈すれば納得できる。

アドーニスの葬儀において聖娼が売淫によって儲けた息子はアドーニス本人であった。日本ばかりでなく、欧州や米国でも、死者の傍らで跡取りの息子夫婦が交合し、生まれた男子は死者の名を名乗る習慣や、老人が死んで40週あと近くで子供が生まれた場合、その子に死んだ老人の名をつける習慣について、かつて論じたことがある。神殿あるいは陵墓における聖婚の子は聖奴婢として神殿に留め置かれた。古代の王家の宮殿は神殿と同じ聖性を持っていた。王の臨終の場で受胎した長男の妻妾から生まれた男子は、他の王子より優先して2世を称した。

インドのある都に徳の高い王がいたが息子にめぐまれなかった。別の都市の豪商に1人の美しい娘がいたが、父が死に、財産は親戚に横領された。母は娘を連れて暗闇の中を逃れた。たまたま、母の肩が串刺しの刑に処せられた盗賊の肩に当たった。盗賊は娘の母に娘を自分の妻に欲しいと頼む。自分には息子がいないので、供養してもらえず、天国にゆけない。この娘が自分の指示どおりどこかで息子を生んだら、その子は自分の田生子で、自分の財産の相続人になれる、と説明した。母は盗賊に娘を与え、その指示に従ってバナヤン樹の下を掘って黄金を手に入れ、盗賊の死体を焼き骨を川に流した。それから娘を連れて王都に向かった。

ある日、商人の娘はテラスから美しいバラモンの姿を見て恋心を覚えた。娘は夫の指示どおり、誰かと交わって息子を手に入れなければならないと思い、大金を積んで1夜の契りを結んだ。やがて美しい男児を出産した。ある夜、シヴァ神が母と娘の夢枕に現れ、生まれた子を王宮の門の所に捨てるように告げた。同時に、シヴァ神は王の夢に現れ、王宮の門に置かれた子を受け取るよう指示した。王子は成長したので、父は王位を譲り、ベナレスで苦行して亡くなった。

王は父王の骨をガンジス川に流し、祖霊祭で供物を捧げるために聖地巡礼に出る。祖霊祭で父に供物を捧げようとする、盗賊とバラモンと王の3つの手がそれを取ろうとして出てきた。供物は盗賊の手に渡すべきものであるとされた。バラモンの青年は金銭と引き替えにわが身を売ったので真の父ではない。亡くなった王は子宝に恵まれなかった、王の真の父ではない。王は盗賊の田生子であり、真の息子であるからである（3人の父

親を持った王」, ソーマデーヴァ『屍鬼二十五話 インド伝奇集』。上村勝彦訳, 東洋文庫, 1978年, 所収)。

インド版の王女と盗賊の話である。ヘロドトス『歴史』2.121以下が伝えるランプシニトス伝説がこれに対応する。ヘロドトスでは2人兄弟の盗人のうち1人は殺される。生き残った兄弟が遊廓で遊女になったランプシニトス王の王女に, 王がつくった宝庫の財宝を盗んだと自慢話をする。ソーマデーヴァでは, 豪商の父を殺されて都から逃げ落ちる娘は串刺し刑にされ死の淵にある盗賊と結婚する。ヘロドトスの王女は大団円で盗賊と結婚し(王の世継ぎを生むことになる)。娘は盗賊が隠していた莫大な財宝を手に入れる。ソーマデーヴァでは, 母は暗闇の中, 肩が盗賊に当たる。ヘロドトスでは生き残った盗賊が死んだ盗賊の肩の所から腕を切り離す。ソーマデーヴァでは, 母は娘の手にすがりついて都を脱出する。ヘロドトスでは盗賊は死人の腕を王女に掴ませて脱出する。

娘は死後の盗賊を供養する男児を儲けるため, バラモンの放蕩息子と1夜の契りを結び, 田生子をつくる。田生子は, 死んだ男, 去勢した男, 病人のために夫以外の男による特別な法により妻に生まれた者のことで, 妻生子ともいう(『マヌの法典』田邊繁子訳, 岩波文庫, 1953年, 286頁)。ランプシニトスは宝蔵をつくらせたが, これは死後のピラミッドをつくる前段階であった。蔵破りを見つけるために王女を娼家に送ったとあるが, 王女が客を取った金銭をピラミッド建設にあてるためでもあった。客は王そのもので, ソーマデーヴァのバラモンの息子と同じであった。この田生子が王宮の前に捨て子にされ, 王家に養育されて王位を譲られる。父王の死後, 祖霊祭の供物を受け取るのは盗賊の手でなければならない。ランプシニトスの靈魂を祭る子孫は宝庫荒らしの盗賊の子孫である。このような制度の中に古代の世界観が潜んでいるようである。

富豪の商人はランプシニトスと対応し, 王女は美しい娘と対応する。富豪の妻は, ランプシニトスが地下界に訪ねていったデメテルに対応する。地上のデメテル社には祭司が2匹の狼に手を引かれて目隠しをされて参ったが, 富豪の妻は娘に手を引かれて夜の暗闇を逃れていった。ソーマデーヴァの盗賊は串刺しにされた槍の先端に置かれていた。ヘロドトスの盗人は死体となって塀に吊されていた。ヘロドトスのランプシニトスは王女の聖所淫売によって供養され, ソーマデーヴァの盗賊は娘によって供養された。いずれの場合も女性の採った手段は聖婚であった。

ヘロドトスによると, ランプシニトス王の冥界降りが縁となって地上でもそれを記念して地母神デメテルの社に参る儀礼が行われた。祭りの当日, 祭司たちは衣を1着織り上げ, 1人の祭司に目隠しをし, その衣服を着せて2匹の狼の手引きでデメテル社に参詣させた(2.122)。衣服は祭司によってデメテル女神にも献納されたであろう。麻や木綿の糸を紡いで布を織る技術が発明されるまでは, 動物の皮が用いられた。祖霊祭に当たる儀礼では, 祭られる神の石像や木像には氏族や部族の祖先獣の剥ぎ取ったばかりの毛皮が掛けられた。

イスラエルでは, 一神教の確立と共に, 先住民族の宗教の残滓が一掃されていった。その1つが神殿聖娼の制度であった。『旧約聖書』の「申命記」はモーセの律法に則って編

まれたもので、次のようにいう。イスラエルの女子は1人も神殿娼婦になってはならない。また、イスラエルの男子は1人も神殿男娼になってはならない。いかなる誓願のためであっても、遊女のもうけや犬の稼ぎをあなたの神、主の宮に携えてはならない。いずれもあなたの神、主のいとわれるものだからである (23.18-19)。

この律法では神殿娼婦にはかつての神の婢や聖娼の面影はない。犬は売笑婦の別名で、聖娼の面影はみじんもない。雌犬の息子は売笑婦の子という悪罵で、古代社会が共有した神の子という意味は持たなかった。遊女や娼婦の稼いだ金で神殿や陵墓を建設する風はなかった。

東京大学仏教青年会において、1981年から1997年まで竹内健講師が行ったゼミナール古代信仰研究会での百余の命題の中に「デーヴァ・ダーシー」がある(真喜志さき子編『竹内健師講義録 古信研公理常用語彙略解』, 琉球信仰史研究所, 2005年)。竹内はいう。デーヴァ・ダーシーは梵語で「神婢」を意味する。中世以降の斎宮、斎院、白拍子、命婦、遊女などの社会的呼称の中にその属性が見られる。ギリシア神殿、チベット寺院における神殿売春婦と訳したら大いに誤解を呼ぶ。伊勢神宮の心の御柱に奉仕する巫女も、リングとの情交がその原理である。神宮最初の斎王であった倭姫の墓が、外宮近くの遊里にあった事情はこれを裏書きするものである。トロイ戦争予言の巫女カッサンドラが犯されるのも、秀吉が法華尼寺の尼と1夜を共にするのも、これらの女が本来、リング祭祀の神婢と見なされたからであろう(26-7頁)。

イスラエルでは夙に神殿娼婦・神殿男娼の制度を忌避する風があったが、その残滓はいくつも見られる。主のことばに、娘が淫行にふけても、嫁が姦淫を行っても、私はとがめはしない。親自身も遊女と共に背き去り、神殿娼婦と共に犠牲を捧げているからだ。悟りのない民は滅びる(「ホセア書」4.14)。ホセアは前8世紀の預言者であるが、古い習慣が行われていた。

前7世紀のヨシア王の時代、「申命記」の基本になった『律法の書』が見つかった。王は宗教改革に着手する。王はアシェラ像を主の神殿からエルサレムの外のキドロンの谷に運び出し、像を焼き碎いて灰にし、民の共同墓地に振り撒いた。王は主の神殿の中にあった神殿男娼の家を取り壊した。そこは神殿娼婦たちがアシェラ像のために布を織っていた所でもあった(「列王記」下23.6-7)。

ユダの王レハブアムはソロモン王の子で、母はアンモン人であった。ユダの人びとの間ではバアル信仰が行われ、高い丘の上(バーマーハ)と繁った木の下に聖なる高台を築き、石柱とアシェラ像を立てた。そこには神殿男娼がいた(「列王記」上14.21-24)。ユダの王アサは神殿男娼を追放し、先祖たちのつくった偶像を全て取り除いた。母マアカがアシェラの憎むべき像をつくったので、彼女を太后の位から退けた(「列王記」上15.9-14)。

アシェラは先住民カナン人の主神バアル神の妻で、アシェラ像は木でつくられていた。女子の参詣者は数多くたむろする男娼と1夜を過ごし、願いごとの成就を祈った。男子の参詣者は女娼と交わった。女娼はバアル神への務めを果たしたことに満足し、稼ぎを神殿に納めた。

日本神話では、天照大神が忌^{いむ}機^{はた}殿で布を織っているとき、スサノヲノミコトが織り殿の屋根に穴を開け、逆剥ぎにした天の斑駒^{ふちこま}の皮を機を織っている大神の上に投げ落とした。大神は梭で陰を突いて死ぬ。別伝では機を織っていたのは若日女^{わかひるめ}（再生した若い日神天照大神）であったともいう。若日女の織った布は心の御柱の天辺から掛ける5種の色の布裂れであった。心の御柱と五月柱とアシェラ像は、季節の変わり目に布を掛けられて再生したのである。日神天照大神は、死んで太陽の車を引く馬の世界に帰っていった。この世とあの世の中間に存在するまだらの馬は太陽神大神のトーテムであった。

伊波普猷『をなり神の島』1（東洋文庫、1973年）にいう。沖縄には尾類と称する一種特別な売笑婦がいる。彼女らは自分たちの鼻祖はおみなりべ（王女すなわち国王のをなり神）であるという。彼女らはある種の神を祭っており、神の依り代となる女子をムイメーという。老妓は巫女同様に世間の人から尊敬を受けている。尾類の鼻祖も他の民族の歴史に見るように、神に仕える巫女にして売笑を兼ねた者（神の妻^め）で、その歴史は琉球の歴史と同じ古さを持っているように思われる。

旧暦の正月20日の夜の大祭では、遊廓の客人（廓内の男子が扮する）を木馬に乗せ、ムイメーの家に引っ張り込んでもてなす儀式がある。それが済むと尾類馬または二十日正月といって客を引きつけるための仮装行列が行われる（20-1頁）。

沖縄の尾類の中に、古代エジプトの王女の姿を見ることができる。伊波は尾類は神に仕える巫女であったことを看破した。遊廓を訪れる客はまれびとと呼ばれ、祭りのあとは儀礼として神の依り代ムイメーの家でもてなしを受ける。ムイメーはイスラエルのアシェラ女神に当たる。ムイメーの儀礼に木馬が現れるが、馬は古代の太陽神テダの化身であろう。馬と尾類が一体になることで儀礼は完了した。客人は太陽神を象徴したのである。客人が馬に乗せられてムイメーの許を訪ねるのは男神と女神の交会を表わす古代の神事であった。

沖縄にはジュリウマあるいは上記のズリウマという春駒の行列が遊廓の遊女によって行われる。ジュリ馬は張り子でつくった長い馬の首の付け根を腹につけ、遊女の首に掛けた紐で馬の首を支え、正月20日の街を行進する。ペーロン競漕、綱引きと共に沖縄の3大祭といわれる。正月20日は小正月の1つであるので、小正月を古い正月の始めとする考えに立てば、祖先獣である馬を迎え入れる新年の行事になる。小正月を正月の終わりとする考えに立てば、祖先獣である馬をあの世に送り返す行事になる。

祖先獣である馬の送迎は、王女、斎王の任務であった。尾類^{ずり}は馬の背に掛ける布を織って祭りに備えたであろう。沖縄の尾類に対応する日神天照大神やイスラエルの聖娼は機を織っていた。織り上がった布は男神像あるいは女神像に掛け、衰弱した神を再生させた。本土では正月の門付けとしての春駒は殆ど見ることができなくなったが、西角井正大「春駒はるごま」によると、まだいくつが残っている（『日本大百科全書』19、小学館）。

春駒の起源を平安時代、1月7日に朝廷で行われた白馬^{あおうま}の節会^{せちえ}から学んだものとする説がある。白馬の節会が崩れて民間の行事になったのではなく、大本は同一でも、別々の道をたどって日本に入ってきたものと思われる。宜保栄治郎「ジュリウマ」にいう。ジュリ

(尾類)の由来は、琉球王国時代、役人が自分の娘を遊女に仕立て、海外からやってくる貿易商人を接待させたことによる(前掲、『大百科全書』11)。前述の尾類が王女を指したという論を想起させる。

春駒に用いる馬の首は沖縄のジュリウマで用いるようなものが一般であるが、江戸時代末期の『守貞漫稿』では、現在、我われが竹馬といっているものと春駒を同じ個所に挙げている。木の馬は棒に馬の首を差し、棒の根元には車輪が付いていた。股から馬の首を出し、地上に車輪を転がしながら進んだ(朝倉治彦編『合本 守貞漫稿』, 東京堂出版, 1988年, 527頁b, 『沖縄大百科事典』(中), 沖縄タイムス社, ジュリ馬, 嘉手川重喜, 1983年)。

大林太良, 他編『民族遊戯大事典』(大修館書店, 1998年)にいう。竹馬は殆ど世界中に見られ、2つの種類がある。1つは足に木を継ぎ足し、足長がになって両手を自由に動かすことができるタイプ。1つは2メートルほどの竹の節に足場を付け、両手で竹を握り、歩くタイプ。2つのタイプはヨーロッパや中国その他に見られるが、起源的には同一ではないらしい。足長がのタイプは大道芸や曲芸になっているが、アフリカでは神を表わす。竹馬の起源は不明であるという(104-9頁, 寒川恒夫)。

『守貞漫稿』に挙げる車輪付きの棒に差した馬の首と同じものがイランの東北で見られる(『ペルシア民俗誌』, 東洋文庫, 1999年, 324頁参照)。イランの子供の春の遊びになっている春駒について以前、東京天理教館で講演したとき、前掲の真喜志沖縄文化研究所長に沖縄の春駒について教示を受けた。沖縄の遊女は古代西アジアの神の婢と同じものであり、神の表象である馬と複合した文化を伝えてきたことが分かった。

竹馬には別のタイプもあった。酒井欣『日本遊戯史』(拓石堂出版社, 1977年復刻, (1933年))第8章竹馬の項に2本足の竹馬の他に、室町時代末期までは、枝葉のついたままの竹を切り取り、竹の根元を持ち、竹に跨がってうしろに長い尻尾状の葉付きの竹を引いてゆく竹馬があったことを述べ、『円光大師本』の挿図を挙げている(584頁)。

聖なる神(男性原理)と神の婢の2項対立の構図は民衆の心裡に深く刻み込まれていたもので文芸作品の中でもそのモチーフは抵抗なく用いられた。四世鶴屋南北の芝居『桜姫東文章』では建長寺の自休という僧と稚児が男色にふける。2人は滝に飛び込んで心中をはかるが、坊主だけ助かって稚児は死ぬ。稚児は公家の娘桜姫に生まれ変わる。坊主はその頃は新清水の清玄という高僧になっている。2人は再会する。桜姫は遊廓より下の淫売宿の遊女をしている。暗闇の中で襲れた男のことが忘れられず、男の腕にあった入れ墨を自分の腕にもしている。姫は公家ことばと下層民の鉄火な^{でんぼう}伝法ことばをチャンポンにしゃべる(『三國連太郎=沖浦和光対話 上』, 解放出版社, 1997年, 184-5頁)。

本土においても沖縄におけると同様に、貴種の女子が娼婦になるという観念が意識の下にあり、聖なる状況の下、それが出てくることが分かる。高僧伝の中ではこのようないわゆるをなり神の存在を必要とした。桜姫は地獄で淫をひさいでも、高僧自休にとっては聖なる存在であった。

マルコ・ポーロ『東方見聞録』(2, 東洋文庫, 1971年)にいう。インド東南端の海岸

部にあるマーバール国では僧院に多くの男女の偶像が祭られている。これらの偶像に多くの女子が奉納される。女たちは自分の相手になる偶像に踊りを奉納し食物を供える。食物のお下がりには皆で共食し、それぞれの家に帰り、結婚するまでこのような生活を続ける。彼女らは男の参詣者が望めば些少の金銭で男の自由になる（183-5頁）。女は神の婢（デーヴァ・ダーシー）で、マルコ・ポーロの記述はヒンドゥー教寺院での聖娼の姿の一端を良く描写している。ここに現れる女子は貴族の子女とはいっていないが、前後の状況から見てそれに準ずる者であることが分かる。インドの場合は、神像のために身を売る女子は高僧の守護霊、をなり神としての性格を持たないが、古くは僧院に住みつく聖なる奴隷であったと考えられる。淫売宿で春を売る女にまで墮としめられる場合もあるが、神の奴婢は相応の家から出された。マルコ・ポーロの記述では男娼の記述はない。女神像には男娼が奉納されたであろう。桜姫の前身は自休に男色を売ったかげまの稚児であったが、稚児じしん、社寺に献じられた男女の神の子であった。

日本では貴種の遊女の伝承は絶えることがなかった。ジーボルト（シーボルト）は1826年の『江戸参府紀行』（斎藤信記、東洋文庫、1967年）の中で、下関について次のような記述を残している。この町には、1826年に1890軒の家があり、住民の人口は5140人、そのうち男2860人、女2340人である。男女の人口の不均衡は遊廓の娼婦が計算に入らなかったことで説明がつく。これらの女たちは、我われの耳には異様に聞こえるかも知れないが、この土地では特別の尊敬を得ている。遊廓の起源はあの壇の浦の海戦にまで遡り、平家一族出の女官や貴族の娘は己れの身を売って生活の資を得た。それゆえ、下関の売春婦は今日に至るまで、貴族の令嬢というのと等しい女郎と称してもよい特権を有している（113頁）。

シーボルトの記述の内容には十分に尽くさない部分もあるが、正しい情報を得ていると思われる。ここの遊廓の遊女には維新の志士たちの愛人もいたし、落籍して政治家の後妻となり名声を博した人物もいる。数十年後に来日した小泉八雲も、平家の亡霊に取り憑かれた人物であった。社寺と土地の人びとの貴人の末裔、ことに落魄して遊里に過ごす女子についての外国人への説明は、ある種の感情を喚起したであろう。欧州人ならば、神の婢、神の妻という概念を知っていたので、これらの遊女が単なる売笑婦ではなく、愛想良く、礼儀正しい女性であることに深い同情を持ったであろう。

神殿聖娼の表われは上來述べてきたように文化によって種々な形式を取った。紀元前18世紀の『ハンムラビ法典』には聖娼に関してのいくつかの知見が見られる。当時、バビロンの神殿に寄贈されたナディートゥムと呼ばれる聖娼がいた。ナディートゥムは王女、祭司の娘、高官の娘、豪商の娘などがこれを務めた。

神殿に寄贈される女性は実の妹か女奴隷を伴って神殿に寄贈された。この女性をシュギートゥムと呼んだ。シュギートゥムは同母異父の姉妹のことであるが、発生的にはナディートゥムのアルテル・エゴ（他我）を指した。『旧約聖書』の「創世記」では、アブラハムの妻サラは子を孕ななかったので、自分のエジプト人の女奴隷ハガルを夫に与え息子イスマイルを得た。サラもハガルも神殿娼婦ではないが、バビロンのマルドゥク神殿へ贈与

された女ナディートゥムと、彼女が伴として連れていったシュギートゥムは同じような関係にあった。

『ハンムラビ法典』182章にいう（中田一郎『ハンムラビ「法典」』、リトン、1999年と佐藤信夫『古代法の翻訳と解釈 I ハンムラビ法典の石柱に刻まれた楔形文字全文の原典

その翻訳および解釈の方法について』を参照した）。もし父親がバビロンのマルドゥクのナディートゥム（中田は修道女、佐藤は女神官と訳す）である自分の娘に持参財を贈らず、彼女に捺印証書を作成しなかったなら、父親が死亡したあと、彼女は兄弟たちと共に父の家の財産から3分の1を彼女の相続分として受け取ることができるが、耕地と果樹園を相続することはできない。マルドゥクの神婢は、彼女の遺産を彼女の意にかなう者に与えることができる（中田、前掲書、53頁）。

マルドゥク神に寄贈された女たちは神殿内の特定の妻たちの家に住んだらしい。年に1度あるいは2度マルドゥクの祭りには参詣者を相手に聖婚を行い、マルドゥク神への務めを果たした。『旧約聖書』に出てくるバアル神殿の男娼に対応する者がマルドゥク神殿にもいたはずであるが、『ハンムラビ法典』には見られない。神殿の女性は日常は畑地の耕作や機織りに従事したらしい。外部との接触も可能であった。法典では、夫が与えられ人間社会に戻ることもあった。神の子を出産する場合、その処置についても慣例があった。

聖娼はシュメル時代からあった。最初シュメル語で書かれた紀元前3千年紀の実在のギルガメシュ王を主人公にした『ギルガメシュ叙事詩』はアッカド語で翻訳されてほぼ完全な姿で現在に伝わる。『ギルガメシュ叙事詩』（月本昭男訳、岩波書店、1996年、矢島文夫訳『ギルガメシュ叙事詩原典訳』、山本書店、1965年）にいう。ウルクの王ギルガメシュは強暴で住民は苦しんだ。神は王に立ち向かうよう、全身が毛に覆われた野人エンキドゥを創った。彼は野獣と共に住み、暴威を振るった。ギルガメシュは狩人に聖娼シャムハトを連れてゆかせ、エンキドゥが水場で野獣に水を飲ませるとき、聖娼にその秘所を開かせるように命じた。

6日7晩、エンキドゥはシャムハトと交わった。聖娼はいった。汝は今や神のようになった。ギルガメシュ王のいるウルクにあるアヌ神とイシュタル神の神殿にゆきましよう。ギルガメシュとエンキドゥは格闘を演じるが、雌雄を決することができず友情で結ばれることとなる。ギルガメシュとエンキドゥは森の怪物フンババを殺し、さらに天から地上に送られた牛を殺す。そのためにエンキドゥは死すべき運命に身を委ね、やがて舞台から消えてゆく（第1の書板－第7の書板）。

聖娼シャムハトはエンキドゥと交わったあと、汝は神になったと告げる。聖娼は自分と交わるのは神の化身であるという信仰を持っていたことの証しである。神となったエンキドゥはギルガメシュ王の守護神であり、アルテル・エゴであった。エンキドゥの死のあと、守護神を失ったギルガメシュは冥界訪門の旅に出る。海辺で先ず会ったのが酌婦シドゥリであった。シドゥリは聖娼でありイシュタル女身の化身でもあった。ギルガメシュはシドゥリによって生命力を恢復する。

R.S. クルーガー『ギルガメシュの探求』（氏原寛監訳、人文書院、1993年）にいう。ギ

ルガメシュは狩人に寺院の聖娼でイシュタルの女司祭であるヒエロデュール（ヒエロドゥーロイのフランス語）を連れてエンキドゥを誘惑させる。ヒエロデュール（神の召し使い）には多くの名前や階級がある。いくつかはセム語であるが多くはシュメル語である。ヒエロデュールは子供を生むことを禁じられたので（この点に関しては議論の余地がある）、もう1人の女性を伴ってきた。ヒエロデュールは聖娼であり女司祭の役割を時に果たしたかも知れない。しかし、彼女たちを「高級娼婦」（ハイデル）、「売春の少女」（スパイザー）、「遊女」（トンプソン）などと解釈するのは厳密とはいえない（34-40頁）。S.N. クレーマー『聖婚』（小川英雄・森雅子訳、新地書房、1989年）は多くのシュメル詩歌を実例に出しながら聖婚の本質を解明する。

神殿娼婦の伝統はシュメル時代、古代エジプト時代以来絶えることなく続き、イランの宗教ミトラス教、エジプトの宗教イシス・オシリス教の影響を受けて成立したキリスト教にも伝承された。神の僕^{しもべ}という観念は信徒の間では広く流通したことばであるが、ヒエロドゥーロイ、ヒエロデュールとして古代世界で広まった神の奴婢の観念や信仰とはかけ離れるものがあつた。

古代の神殿とそこに捧げられる男女の神の奴婢の制度は、カトリックの修道院の制度の中に温存された。キリスト教の場合はその僧院が確立するのは6世紀のベネディクトゥス以来のことであるが、それ以前のイタリア半島では、メソポタミアやエジプトのヒエロドゥーロイの形に近いものが残っていたと思われる。イエスとその使徒たちが広めた教えは、あらゆる面で、ことに倫理面で旧来の西アジアの宗教（ときには『旧約』をも含めて）から脱却するものであつた。

修道院では従順、貞潔、清貧をモットーとした。修道女は処女性をイエスに捧げ、終生イエスの妻としての貞操を守り、古代の神殿娼婦のような行為はしない。ある期間神殿で奉仕し、夫を与えられて結婚し神殿を去ることもない。古代の神殿娼婦は裕福な家庭の出が多く、年1回の大祭では性的な仕草やことば、装飾品で男の参詣者の気を引いた。

世俗から聖の世界へ逃避する場合はカトリックの世界ではよく見られたので、必ずしも処女性がどうのということもなかった。中世フランスのスコラ神学者アベラールは弟子のエロイズとの間が恋愛に発展したが、1夜の激しい性的交渉のあと、それぞれ修道院に入り世を終えた。2人が交わした恋愛書簡集に見られる愛と修道の相剋は人の心を打つ（『アベラールとエロイズ 愛と修道の手紙』畠中尚志訳、岩波文庫、1964年改訳、〈1939年〉）。

19世紀初頭、南ドイツのベネディクト＝ボーエルン修道院で発見された中世移動学生によって歌われたラテン語とドイツ語の歌謡集「カルミナ・ブラーナ（ボーエルン歌謡集）」は愛、酒、賭博などの世俗文学と宗教劇を含む。20世紀前半、カール・オルフが曲を付けたカンタータが知られる。西アジア、エジプトから受け継いだ信仰は、キリスト教となり浄化されてゆく。

アルノルド・ヴァン・ジェネップ『通過儀礼』（秋山さと子・彌永信美訳、思索社、1977年）にいう。聖なる処女、聖なる娼婦が新たな地位を獲得するためには通過儀礼の

図式に則った儀式を経なければならない。『ローマ司教用定式書』にある処女の叙任式の次第は次のようになる。処女たちはヴェールも外套も頭巾もまとわずに連れてこられる。彼女らは2人ずつ並んで膝まずく。彼女らは司教に近づき、立ち上って輪になり ($2 \times n$ 人が叙任される), 1人ずつが司教の所に進んで己れの処女性を捧げることを約束する。司教は、主イエス・キリストの妻として祝福され、捧げられ、結ばれることを受諾するかどうかを問う。彼女らは、それを望むと答える。

司教は「主、聖霊は来たれり」を歌い、彼女らは平服を脱ぎ新しい服を着ける。司教はヴェール、指輪を祝福する。処女たちは「わが身は主に捧げられたり。我その人を見ん」と歌う。司教は彼女らにヴェールを被せ、右手の指に指輪をはめ、冠を被らせる。聖別された処女たちは女子大修道院長の手に渡される。衣服の変更とヴェールの着用によって神的世界と合体する (106-7頁)。

古くから聖娼が自分のアルテル・エゴを伴い2人で1組になった事例があるが、カトリックでそれが継承されていることが分かる。叙任式に参加する処女は10人余りであるが、彼女らは式の途中、輪になって司祭を囲む。日本の子供の遊戯に、「中の中のぼんぼんさん、何で背が低いの…後ろに誰がいる」と唱しながら、女の子が手を繋いで回るのがある。同じような名当ての遊びに、「カゴメ、カゴメ、籠の中の鳥はいついつ出やる…後ろの正面誰」がある。このような地蔵遊びは、真ん中に座った子が目隠しをして円陣を組んだ女の子が時計の針と同じ方向に回り、歌が終わると同時に立ち止まり、中に座った子に自分の後ろに立つ子の名をいい当てさせる。いい当てた場合、当たらなかった場合、それぞれ賞罰がある。真ん中に座った地蔵や子供は、神仏が憑依する形式で、後ろの正面に立つ子供は神仏に指名される人物となる (『定本 柳田國男集』第19巻、66-7頁)。

ローマの年1度の結婚式は、同数の男女が向き合って立ち、男が壺の中に入れた相手の女の名を書いたくじを引いた。向かい合った男女の列の間の壺と神の意思を表わしたくじが、わが「中の中のぼんぼんさん」に当たった。日本では神聖な大人の行事を子供が真似して遊戯として伝えているが、古代に行われた種々な指名の手続きであった。司祭はイエス・キリストの妻になる第1の女性を選び、その女に初夜権を行使するために彼女らに円陣を組ませて指名したのであろう。中世以後の修道院でも行われたのではないと思われる。初夜権を行使した司祭は、相手の女性の左指に指輪を付け替えた。司祭は聖処女と合体することにより、自らが神格を得ると同時に、相手の女性も神格と一体化することになった。修道女志願の女子は純潔の処女神アルテミスであると同時に愛の女神アプロディテであった。

木村重信『ヴィーナス以前』(中公新書, 1982年)にいう。トルコのエベソ (エベソス) にある乳房を大量につけたアルテミス像は有名である。この純潔の女神がエベソスで熱烈に崇拝されたのは『新約聖書』の「使徒行伝」の伝える通りである。パウロもただ静観せざるをえなかったほどの祭りであった。アルテミス月の春の祭りに行われる乱痴気さわざぎでは、男はおのが肉体をもてあそび、女はおのが肉体を売るという酒宴であった (156-7頁)。1世紀前後のアルテミス祭の伝統は、多くの乳房が表象するヒエラ・ドゥーロイと

共にキリスト教の修道院の成立にも尾を引いていた。司祭と尼の艶笑譚が欧州ではしばしば聞かれるが、大きな理由があつてのことであろう。

折口信夫によると、花嫁のお初穂は夫に上げるのではなく、えびす様、まれびとに上げるという習俗があった。初夜に夫は遊廓に遊びにゆく。初夜の家で一人で待っている妻の所に、神事に与っている者が神人として訪れてきた。初夜に訪れる神人をえびす様と呼んだ。えびす様の呼称は中部の山の多い地方にも残っているし、沖縄地方にもそれがある（『折口信夫全集』第1巻、中央公論社、1965年、45、462-3頁）。

10世紀、ボハラに生きた史家ナルシャヒーによってアラビア語で著作された『ボハラ史』が、12世紀にペルシア語訳された。このテキストは省訳であるが、その後多くの写字生によって増補され、現在のペルシア語テキストが成立した。リチャード・N. フライの英訳『ボハラ史』（マサチューセツ、1954年）がある。

『ボハラ史』の挿語 どの村でも、娘と結婚したい人がある場合、最初に娘の処女性を奪い、その後、新郎に娘を渡す人物がいる。ペルシア語翻訳者は村の長老たちに、このような楽しみがたった1人の人物にのみ与えられ、他の人びとはこの楽しみに与れない理由は何であるか尋ねた。長老たちは、これが彼らの取り決めで、成年に達した若者は、彼らが結婚するまではこの男と男色を行う。このことに対する彼への謝礼は、新妻が1夜だけ彼と過ごすことである。この人物が老いると、別の人物がこれに代わる。村の人たちはこの人物といつも交渉を持つ、と答えた（75頁）。

ボハラは現在はウズベキスタンの都市であるが、当時はイラン文化圏の版図に入っていた。ペルシア語訳者は、この話が本当なのかどうか、私には分からない、といっていることから見ると、彼は艶笑譚の類と思ったのかも知れない。ところで、この人物は村の長老といわれるような老人ではなく元気な壮年の人物であった。初夜権を行使するのは神の代理である王、僧、司祭、男娼で、その名残りを留める人物によっても行使された。

14世紀に書かれた架空の東洋周遊記であるJ. マンデヴィル『東方旅行記』（大場正史訳、東洋文庫、1964年）は、単なる荒唐無稽な物語の集成とは考えられない面がある。奇想天外の珍習をでっち上げたとは思えない節も多々ある。ある島では花嫁は初夜に夫と同衾してはならない。その代わり、別の若い男がその夜彼女を試みて初鉢を割り、翌日、前夜の報酬としてなにがしかの金銭を受け取る。

あらゆる町に、その役目を引き受ける若者たちが決められていて、人びとは彼らを「絶望した愚者」と呼んでいる。土地の人たちの証言によると、処女膜を破るのは自らを死の危険にさらすことになるからである。処女の体内には蛇が住みつき、それが新郎の魔羅に咬みつき、そのために男が死ぬからである。新郎が翌日、妻が破瓜されていないことを知ると、裁判官に若者を告発する。この若者がすんでのことで新郎を殺すところだったからである。花嫁たちは初夜に破瓜されたあとは、それらの男と交際してはならない（249-50頁）。

訳者注によると「絶望した愚者」の名称の意味ははっきりしない。この話の由来も判明していない。話の源は破瓜の恐怖、魔力の存在、もしくは男性のインポテンスの恐怖など

に結びつけられる。訳者は自著『世界性語学事典』（白風社）の「デフロレイション」の項を参照するよう指示する。この異習は血に対する不浄感や恐怖感から生じたもので、フィリピン、チベット、東アフリカなどで今日も行われているらしい。

マンデヴィルの著書はナルシャヒーの著書のペルシア語訳から2世紀も後に出たものである。初夜権に関する記述は迫真性があり、つくり物の感じはしない。一般民衆の間では普及していた習俗であった。ヘロドトス『歴史』1.199が伝えるバビロンの年1回の男女の交会では、既婚、未婚を問わずイシュタル女神の社に女が参加して男の参詣者と1夜を契ったが、その後はいくら大金を積んでも応じることはなかった。この場合は未婚の女は必ずしも初夜とは関係なかった。自らが女神に代わり、男神の化身である参詣者と交会して全体性の回復を図ったのである。

初物は神の取り分であるとする世界に広く見られる思想がある。農作物、海産物の初物を神への供物とするのはキリスト教、仏教、神道の別なく行われてきたし、民衆生活でも欠くことのできない風習である人間や家畜の子の初物は現在でも神に供えられる。古代の神の婢として奉獻された女子は、神の代理人である参詣者や神殿の祭司によって初物として処理された。農作物の初物を神に供え、それを下げて皆でいただく神人共食の儀礼がある。神殿娼婦にも同じような原理が適用された。

インド南部のタミル族のヒンドゥー神殿には舞踊女が献じられ、デーヴァ・ダーシーと呼ばれる。マドラスでは初物として各家の長女が神殿に献じられるが、神の妻になる前に、神像ときには剣と結婚する。タミル族では機織りのカーストの娘がよく神の妻に選ばれるが、前述したように、聖娼と機織りは関係のある文化であった（J.G. フレイザー『金枝篇』第4部、アドーニス、アッティス、オシリス、第1巻、ロンドン、1914年、61-2頁）。

奉獻される女がバラモン階級に属していたなら、聖娼として迎える男はバラモンであった（前掲書、63頁）。『南方熊楠全集』1（平凡社）に、ジュボア『印度の風俗習慣および礼儀』第2巻、609頁他に、梵士が神の妻にするとて美婦を望むに、親や夫が悦んでこれを奉り、梵士の慰み物としてその寺に納れる由を記す、とある（『十二支考』462頁）。

パレスティナの先住民であるアモリ人の規則では、これから結婚しようとする娘は7日間、家の門の傍らで淫をひさがなければならなかった（フレイザー、前掲書、37-8頁）。アモリ人は『旧約聖書』『エゼキエル書』16.3に伝えられるように、ユダヤ人の血の中に入っている先住民族であった。父はアモリ人、母はヘテ（ヒッタイト）人とある。アモリ人はヒッタイト人に滅されて民族の存在は消えた。

ユダヤ教徒もイスラム教徒も、一神教徒として確立してゆくと、門前で娘が多くの神の化身のエネルギーを受ける先住民族の風習から遠ざかった。ユダヤ人、イラン人、アフガニスタン人、その他のイスラム教団の人びとの習俗では、結婚して初夜に処女でないと婚家が認めて実家に送り返された娘は、実家の門口で近隣の人びとから石を投げられて殺され、入り口に積まれた石の下にその死体が置かれた。処女であることが証明された花嫁の敷き布は、婚家の父が翌朝、入り口の平屋根の上からお祝いに集まった近隣の人びとに披露した。このことに関しては、入り口に押された赤い手形と共にかつて論じたことがある。

宗教史的に見ると、境界における神との契約が表裏全く別の形で表われている。

『新約聖書』『マタイ伝』第1章のイエスの誕生についての伝説にも初夜権の変異形が見られる。マリアはヨセフと婚約していたが、2人が一緒になる前に聖霊によって孕ていることが明らかになった。ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにすることを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。

このように考えていると、主の天使が夢に現れていった。「タビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を生む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。この全てのことが起こったのは、主が預言者を通していわれていたことが実現するためであった。「見よ。おとめが孕って男の子を生む。その名はインマヌエルと呼ばれる」この名は「神は我われと共におられる」という意味である」。ヨセフは夢から覚めると、主の天使が命じた通り妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そしてその子をイエスと名付けた（『マタイ伝』1.18-25）。

『新共同訳 新約聖書注解』1（高橋虔・B. シュナイダー監修、日本基督教団出版局、1991年）の1.18-25のイエス・キリストの誕生（ルカ2.1-7）を参考に論じる。マリアが結婚前に孕んでいることが公けになれば、マリアは石打ちの刑に処せられる（『申命記』22.23以下）。西アジアには神に仕える女が生んだ子は神の子であるとする伝承があったので、近代の家族法では律し切れない側面を持っていた。イエスは「マタイ伝」冒頭の系図に述べられるように、アブラハムの子ダビデの子イエスなのである。アブラハム、ダビデの子孫というより、神の子として神聖な系図の上に神の子、最後の預言者として登場する。

註解にいう。イエスの誕生に関与したのは聖霊であってヨセフではない。イエスはダビデの子といわれるが、ヨセフの子ではない。この神話はヘレニズム時代の神話を思い起こさせる。ヘラクレス、ペルセウス、アレクサンドロスはゼウス神によって処女を母親として生まれ、ピタゴラス、プラトン、アウグストゥスらはアポロン神によって生まれたという。神々はしばしば姿を変えて女性と関係を持つ。イエスの誕生にはそのような経緯はない。マリアの場合は古代西アジアの聖婚の変異形である。

聖婚によって誕生した神の子が、教義上の救世主として解釈されるのはキリスト教が初めてである。キリスト教成立に大きい影響を与えた古代イランのゾロアスター教のミトラ（ミスラ）は、仏教ではミフラク＝弥勒として、仏の没後56億7千万年後に出現し、人びとを救済するとされる。ミトラは天神アフラマズダーとその妻アナーヒターの間の子で、天の聖霊とマリアの子イエスと対応関係にある。

イエスは一方、インマヌエルの名で呼ばれる。『イザヤ書』7.14-15で、「見よ、おとめが孕って男の子を生み、その名をインマヌエルと呼ぶ。災いを退け、幸いを選ぶことを知るようになるまで彼は凝乳と蜂蜜を食物とする」とイザヤは預言する。イランのミトラ信仰とイザヤの預言がどのように重なったのか知りたい所である。キリスト教内部での信仰的、教義的解釈ではどうにもならない面がある。

マリアの処女受胎はアナーヒター神殿での処女受胎と考える方が、非信仰的解釈として

は良いのではなかろうか。前掲、ストラボン『世界地誌』に、アルメニアのアナイティス神殿に貴顕は娘を奉納し、そのあと嫁に出した、とあったが、聖母マリアにもこれを通じると思う。当時のアルメニアは独立国家ではなく、バルティア文化圏の1属州に過ぎなかったもので、結婚前の処女の処理はイランでも同じことが行われたであろう。

カトリックではマリアが天使ガブリエルに聖霊の受胎を告知されたのは3月25日で、12月25日が誕生日である。古代西アジアで広く行われた年の変わり目に祖霊を迎え、女子が祖霊を胎内に入れるのが春分の日であった。受胎してから40週280日後の冬至の頃に分娩することになっていた。イランのミトラ（ミスラ）神の誕生日は冬至であったので、イエス・キリストの誕生はイラニズムの影響を受けたことが分かる。

旧暦7月7日は太陽暦の8月8日の立秋前後に当たり、立春前後に正月を置く中国の旧暦は立秋を年1回の男女交会の日とした。その結実は翌年の4月8日（新暦では5月8日）の釈迦の誕生で代表される。朝鮮の「春香歌」の春香は4月8日生まれである（申在孝『パンソリ』姜漢永・田中明訳注、東洋文庫、1982年、16頁）。中国では冬至誕生を聖人君子の誕生とする習慣があった。孔子は旧暦11月4日に生まれた（中川忠英『清浴紀聞』2、孫伯醇・村松一弥訳、東洋文庫、1966年、巻5、37頁）。毛沢東は冬至の子とされた。

客人を泊めた家の主人が、自分の妻女を客に進める風習は古来日本にもあるが、13世紀のマルコ・ポーロは『東方見聞録』1（愛宕松男訳注、東洋文庫、1970年）で次のような記述を残している。カムール国（現在の哈密地方）では客人があると主人は妻に客人の接待を命じ、自分は外に出てゆく。妻は客人と同衾してしたい放題をする。このことがモンゴルの族長モング・カーンに知れ、禁令が発せられた。その結果、産物が減り災いが起きようになった。人びとはカーンに祖先以来の慣習を許されんことを願い出て許されることになり、人びとの生活はもとに戻った（125-6頁）。

マルコ・ポーロはチベットの人びとの結婚の風習を述べる。ここでは処女を妻に迎えない。男を1人も知らない女は神々の嫌忌を受けているので、男たちはかかる女を忌避する。換言するなら、もし女がもろもろの偶像から愛されるようなら、男たちはこの女を追い求めてでも手に入れようとするに違いない、というのである。外からやってきた見知らぬ人びとがこの土地にテントを張って宿泊すると、町から村から年配の女がその娘を連れ、ときに20人から40人の集団をなしてテントにやってきて娘たちを外来者に勧める。外来者は娘たちをテントに入れて楽しみ、記念の品を与える。娘たちはそれを首に下げ、男たちと寝た証拠であると示す。土地の男たちは彼女たちとすぐ結婚し、彼女たちは神々に最も愛せられた女だと吹聴する。1度結婚してしまうと夫たちは妻を厳重に監視し、他人に手を出させない（296-7頁）。

マルコ・ポーロは人類学者ではないが、後世の人類学者の使用に堪える価値の高い資料を残している。当時の欧州人には、信じられない艶笑譚に映ったに違いない。ヘロドトス『歴史』1.199に見られるバビロンの一夜婚では、女神殿で待ち受ける女子は既婚、未婚を問わなかった。参詣者は外来者に対応し、女たちにとってはその日だけは神の化身であった。モンゴルやチベットの処女たちは結婚前に仏像に奉獻され、仏の化身である男の客人

たちによって破瓜されたのである。チベットの場合は結婚した女は客人の自由にはさせなかったが、モンゴルでは既婚、未婚を問わず外来客に奉仕した。

別所梅之助『聖書民俗考』（有明書房，1975年〈1933年〉）に、以婦侍宿の小見出しで世界の諸民族名を列挙するが、具体的にどのようなことが行われたのか、記述がないので不明である。日本の名も挙げてある。『淵鑑類函』が引く『西漠地理志』に「賓客相過ぐ、婦を以て宿に侍す」の句のあるのを記す。アイルランドの英雄譚、フランスの中世文学の名も出てくる（117-8頁）。

J.A. マクカロクは、E. ウェスターマーク『人類の婚姻の歴史』（ロンドン，1891年）を参照しながら、客に妻女を貸してもてなす行為の起源と理由を挙げる。妻は夫の財産であるので人に貸したり友人と交換したりできるのだという理由の他、客は敵対者と考えられた（hospitality / hostile）ので、その敵意を慰めるためという理由を挙げる。最後に宗教的な理由を挙げる（J. ヘイスティングズ『宗教・倫理百科事典』第1巻，エディンバラ，1908年，125-6頁）。

（2007. 5. 17 受理）